

知識の基礎としての純粹經驗

高山 善光

広島大学総合科学研究科

西田が記した「經驗するというのは事実其儘に知るの意である。全く自己の細工を棄てて、事実に従うて知るのである。純粹というのは、普通に經驗といっている者もその実は何らかの思想を交えているから、毫も思慮分別を加えない、真に經驗其儘の状態をいうのである」という言葉は、西田自身の思索の対象とその領域が、従来の知識論・認識論で語られてきた「自己」や「經驗」とは異なっていることを示している。本発表が行うことは、この違いを明確にすることであり、さらにそれを哲学史に位置づけることである。またそれと同時に、西田の発見した新たな領域の功績と、現代的意義を示す。

西田の經驗概念は、1911年に『善の研究』が出版されて以来、〈純粹經驗〉として広く知られており、その大要は特に「主客合一」という言葉をもって理解されている。一見、「主客合一」の状態というと宗教的、神秘的な境地といったものをわれわれは想定するが、しかし西田の『善の研究』を一瞥すれば理解されるように、この状態は決して宗教的な領域に限ってのことではない。それは西田が「すべてを説明したい」と述べたように、科学や倫理そして宗教といったあらゆる分野に共通するものだと考えられているのである。すなわち、西田は、われわれがどのようなものをどのように考えているときでも、この純粹經驗の「主客合一」の状態が見出せると考えているのである。

このように西田の思索をとらえた場合、通常別々のものと考えられている宗教、科学、倫理等を文字通り別々に考える領域と、これら別々のものを「一元論的に」考える西田の思い描く領域とが異なっていると想定する必要がでてくる。西田の言葉を用いれば、この領域の違いは「思慮分別」を加えている領域と、加えない領域として分けられるものである。すなわち西田は、「思慮分別」を加えない状態においては、通常われわれが別々のものだと考えているものが、「一元論的に」存在していると考えているのである。そしてこの領域の違いこそが、おそらく西田自身が自覚しているように、従来の「自己」や「經驗」と西田のそれとの違いなのである。

ところで、この従来の「自己」や「經驗」、「主体」や「客体」とは異なる領域にある「主客合一」の状態を、西田は1. 精神と肉体の関係、2. 知る主体とその対象といった関係に対して用い、考察している。このうち1に関しては、今まさに精神と肉体という二つのモデルを立てて考えている「具体的な」自己が、実は精神も肉体も持ち合わせている一人間であると記述することによって説明されている。西田はこの精神としての自己と肉体としての自己の両方に共通する「具体的な」自己を「真の自己」として記述するが、このうち他者から見られる部分が機械的な運動をする肉体であり、もう一つの側面が統一の形式をもつ意志すなわち精神であると考えているのである。

そして2に関しても要はIその「具体的な」自己を含め、すべての事物が主体にもなりうるし、見方によっては他の存在物と同様に客体にもなりうる単なる実在であるという点、そしてIIあらゆる「具体的な」事物は自己の個性(主)に外からの影響(客)を受けて成立しているという点に着目してのことである。いうなれば、ただ存在しているという、主体としての存在と客体としての存在に共通している点を西田は記述しようとしたのであって、それを見ている自己がどのように分析され考えられようが存在しているのと同様に、目の前の対象もどのように考えられようが単に存在している、ということを目指しようとしたのである。この目の前の事物の存在がその自己に信じられるのは、それが他の目にはどう映っているにせよ、その自己が実際にそれを見ているからであり、あるいは実際に経験となっているためである。それらは、「具体的な」自己(主)が様々な要因(客)によって成立しているように、具体的に成立しているのであって、見るものも見られるものも、すべてが「統一」の形式によって成立しているのである、と西田は考えるのである。

先にも述べたように、西田によればこのような状態は「思慮分別を加えない」状態として見出される。そしてすべての知識の生産と、その正当性は、このどのように分析され考えられようが存在している「具体的な」自己によって定められるとしている。すなわち、その知識の生産にはその動的で「具体的な」自己の経験が欠かせず、またその正当性にもその経験で得たものの整合性が欠かせないのである。この自己によって生み出された知識が経験の「統一」によって成立しているということは、西田によれば、そこに所謂「知識」のほかには情熱や達成感、それに暗澹たる思いや、人生の苦悩や喜びから得た様々な要因があるということによって説明されるものである。ただそれが、他者の視点から見たときに、単に「知識」と判断されるのである。さらに西田は、自己の経験の整合性あるいは統一性が或る「知識」の正当性に関わっていると考えている。すなわち個人の経験のみの整合性に基ついた、個人のみ信じられる正当な知識も存在すれば、二人以上の、あるいは人数に関わらずより豊富な経験の整合性に基づく正当性も存在するというのである。そしてこのような観点からわれわれは次のように指摘することができる。すなわち、この時視点を経験に移して見るならば、積み重ねの上に正当な知識が成立しているように見え、あるいは経験を排除した「知識」に視点を移して見るならば、それぞれの経験の豊富さによって正当な「知識」が異なっていると。

さらに、西田の視点から見れば、この「思慮分別を加えない」領域に対する考察が欠けていたことが、従来の哲学の数々の混乱を生み出してきたのではないかと指摘することができる。すなわち、デカルトはエリサベトに向かって精神と肉体の合一は哲学的思惟を加えないときに感じることができるとしながらも、自己の本質をあくまで分析された結果として見出される精神というカテゴリーに見出している。そしてまた、カントやフッサールにおいては認識の主体というものが強調され、例え認識していなくても、ただ存在している「具体的な」自己は忘れ去られているのである。しかし実際に知識を生み出しているのも、その正当性を承認しているのも、この自己なのであって考えられた「自己」ではない。ここにわれわれは、西田の発見した領域の重要性を見出すことができるのである。